『日本中世の黎明』（京都大学学術出版会、2001年3月）

文学部助教授 佐藤 泰弘

平安時代は古代から中世への移行期と考えられている。私が大学院に入った1980年代の後半は、1960年代末期に提示された王朝国家体制論が研究の指針であった。王朝国家論は国家論を志向するものの、実は社会経済史の研究成果に基礎付けられた学説である。摂関政治や院政という政治史の時期区分とは一線を画しつつ、当該期の様々な事柄をとともうまく説明した、魅力的な学説だった。そこでは移行期に独自の支配体制を見出すという立場から、10世紀初頭と11世紀中頃に地方支配の諸制度が転換することが論じられていた。そしてこの枠組みは新しい研究成果を着実に生み出していた。

しかし論文を読みすすめるなかで、ある史料の解釈が間違っていることに気付いた。一つ変わると、将棋倒しのように、たくさんの史料が違って見えてきた。それとともに論文の読み方も変わった。新しい事柄を発見しているにもかかわらず、既存の枠に議論を収束させるものが多いことに気付いた。魅力的だった王朝国家論は桎梏になった。これをはずせばもっと自由になるが、しかし、それを根底的に批判した論文は存在しなかった。

本書では、10世紀初頭と11世紀中頃における転換を示すとされた論拠を批判し、その上で古代から中世への決定的な転換点が10世紀末期にあることを論じた。新たな事柄を見つけ、史料操作や論証方法を見直した。そのうえで、古代社会と中世社会の差異を社会編成の多元化として理解することを述べた。具体的に検討した事柄は土地制度、徴税制度、国司制度であり、主として用いたのは古文書と古記録である。研究の主題が多様化し、画像資料や木簡・金石文などを駆使するようになったことに比し、主題も史料も保守的であることは間違いない。しかし新しい研究は古いものから離れようとしながら、重要ところで古典的主题に立脚していることも確かである。また、西洋史や東洋史、社会学や人類学、政治学や経済学、思想史や文学研究などの分析概念を導入することで、新しく興味深い成果が生み出されていたが、これまでに考えられてきたことを考え直すことの方が面白そうだった。流行を追うのは嫌いだし、一人くらいは古いことをやっていた方がいいだろう。このように考えて行った作業の結果が、本書である。

しかし本書の過半を占める既発表論文は、今になってみれば、1990年代の傾向を濃厚に示している。流行した諸分野からの影響は、直接に依拠していなくとも明瞭である。また10世紀後半～11世紀への注目、文書様式の重視、個人の取り結ぶ社会関係への興味、流通や金融・貨幣・信用への関心。本書に書き込むのを躊躇した方法的個人主義という言葉が中国史の本の中で見たときはさすがに驚いた。そして問題の立て方や接近の仕方は関西風・京都的な伝統にしたがっている。つまるところ本書は、歴史研究が時代の産物であることを示す、ささやかな実例となっているのではないかと思う。

徹底的に批判するのが王朝国家論への仁義だと思ったわりには、もっと明瞭に書くべきであったのかもしれない。また明らかにした事柄を意味づけるために造った新しい言葉が、独りよがりではなかったか。そして本書の結論は、表面的には、王朝国家論以前の、摂関政治・院政という時期区分にほぼ一致している。もしかしたら本書は王朝国家論よりもさらに古い枠組みにとらわれているのではないか。ともあれ評価は著者が語るべきではなく、読者に委ねるべきだろう。